

日曜日には TVを消せ 4+2

★75.5.18(日)
★4+2番外&74総集篇(続)

★制作★PHC-TV
(TOYOHASHI-ODAWARA)

★提供★混血桃色通信=PHC=
(豊橋市植田町清永山3の5)
清永荘 〒440
藤田 眞男=MAO=

《お知らせ・その他》

▶4/13付号外を出した後、札幌信の
局を引き払ったYOTAとの交信の
がよやく回復。お互い移転先の
住所を知らずに引っこしたので、
なかなかな連絡がとれなかった
▶YOTAの新生活は下記の通り
〒250
小田原市浜町2の8の20
榊原方・池田博明

▶花の女子高教師とあったYOTA
Aセンセの近況…授業はマテ
ガイを教えたまま、生徒のいう
汗。遠足に行ったら、入ってく
には、先生が教室へ入るまで、
こうこから出さないとが、お懸
うしく、笑いをこらえながら、
命でもおかけないよ！。マジメ
やっつかるの。悩むの。ココロ
だとうである。引っこした、ま
Vセットを買った。忙しい、映
るくにみられたい、その、本誌
るもよう。なんとかやると、
と。YOTAセンセに、はげまし
の便りを出そう！

▶えっ、と、ぼくの方にはマはあ
のぞすが、TVセッとなし、おま
けにコピー料金値上げとあって、
これはまごのようになりまし。そ
は不可能となりまして。そんな
けれど、YOTAとぼくとど、二
あやせ一人前にもならな。か
しれないけど、とにかく続け
もりなので、これは多少変って
内容やスタイルは多少変って
ぼくとYOTAが作るミニコミ
あることには変りないから。

▶PHCラジオのカセット・テー
プは、どうも、ぼくのミスのため
いまだにどこかごうろうとして
るのではないかと思、目下、捜
索中。東京以北の方は、しばら
お待ち下さい。テープが一順し
ら、みんなの感想や資料をま
て「都会の二つの顔」について、
パンフを一冊作るつもりなので、
なるべく感想を寄せ下さい。

▶今号は、一応、この前のつづき
に作るけど、ままたの二つを
く余裕はないので、ペラペラの
冊子になります。やはりかいた
は、とにかく片付けておき
で、更に“4+3”へとつづ
予定。

P.S. - カセット・テープは、かなり手間どってはいますが、行方不明にならずリー中
と判明。おせわがせしました。

SIGHT & SOUND

★MEMOIR 74★

★スペースが限られていて、何を書いたらいいものか？何を書かなくてもいいのだが？じゃ何も書かなくていいか？と迷うのだが、とにかく、ぼく自身のため、覚え書きなりで、何だっさいの。今回は、とりあえず、ぼくの好きなSFとアニメについて、少しだけメモを残しておいて、前号に紹介した各番組について、おもしろい内にと、いろいろ書いておきたいけど、それはまたの機会にゆずる。忘れてしまったら、仕方がない。そういうものだ！

▼「スーパードロボットのレッドバロン」74・3・27 終了（小林利雄（企画・制作）上原正三・ボブ・佐久間（脚本）ボブ・佐久間（音楽）鈴木清十外山徹ほか（演出）

★出演 田田洋介・牧れい・玉川伊佐男ほか。フィルム。玉

なにしろ気宇壮大なお話なので、しかも、全シリーズを通して、しっかりと構想に基づいて、ただでも大変なのだが、かんたん、地球人を奴隷としてその支配下におかんとする。鉄面党。およびレッド・バロン。というロボットのかつやく。近頃、これほどマジメにトリック撮影をやっているSFは他になかつた。手をぬこうと思えばいくらでもぬけるから、実にいかげんな特撮が多い中で、これは、本当にテマヒマかけて、面白くみせようという努力している。ミニチュアと実写の合成やカットバックの巧みさ、加えて、ワイド・レンズをうまく用いてスケール・アップを計ったり、スクリーン・フロセスの使い方もみごとく、あくまでも新鮮なアイデアを大切にする正攻法。美術がまたコッていて、ドイツ表現派ふうでもいうか。多

分、お話から考えても、フリッツ・ラングの「メトロポリス」あたりをベースにしているのかもしれないが、脚本の上原正三は、円谷プロ「怪奇大作戦」(TBS)「実相寺昭雄なんかやっていたシリズ」なのだから、書いてた人。ボブ・佐久間は、「ザ・ホリデイ」はじめTBSの音楽番組の多くを担当していた若手のピアノスト、アレクシヤ・アルバムのアレンジも彼がやっていた。演出の鈴木清は、どういう人か知らないけど、清順さんの変名かしら？と思っうほどの腕。出演者の中に、清順作品でおなじみの玉川伊佐男（「けんかえれじい」の校長先生）がいるからまた面白い。紅一点の牧れいは知ってる人は少ないだろうけど、東宝の学園ものをふり出しに、歌手、ファッシュ・モデル、TBSのタレントと、何でもやってる女のゴ。実にクールでハードで、男顔負けの大かつやく。声は、しかし、ユーミンの如く甘ったるく、アンバランスな魅力。

宮内恵子↓牧麗子↓牧レイ↓牧
れい↓と度々改名して行くけど
あまり売れないようです。残念。
日活の牧れい子とは全く別人。
平田春祥氏の証言「こういう
女優を使いこなせる監督は、日
本にはいないでしょー」。残念
ながら、そのようです。



牧 麗子 (19) 160 80-58-84
歌もお芝居もできる幅広いタレ
ントモデル★SOS (542)7901

▽「宇宙戦艦ヤマト」74・70・
67・75・30 (2クール)
NTV制作・よみうりテ
レビ+オ一枚映+オフェイス
アカデミー
★西崎義展+山本暎一(企画・
原案) 西崎義展(プロデュー
ス) 藤川圭介+山本暎一(脚
本) 宮川泰(音楽) 石黒昇(脚
演出) 山本暎一+舛田利雄(+
豊田有恒(監修) 松本零士(+
デザイン設定・監督)

★声の出演 納谷悟郎・富山敬
永井一郎・麻上洋子・仲村秀
生ほか。カラー・アニメ。

こゝまた雄大なスペース・ロ
マン。恐らく、わが国のTV・
映画史上初の本格的SFリスパ
キュレイテイヴ・ファンタジイ
といっても過言ではあるまい。
それは、スタツフの顔ぶれをみ
てもうえばわかるだろう。
山本暎一は、わが国初のTV
アニメ「鉄腕アトム」のわが国
初のTVカラー・アニメ「ジャ
ンゲル大帝」を手がけた。この
世界のパイオニア。劇場用の虫
フロ作品も多い。しかし、それ
らすべてを「ヤマト」は超えて
いる。

音楽は「約束」で名を上げた
宮川泰(ひろし)。この人脈は
ザ・ピーナツツのヒット曲の数
々でも有名ぬ。映画では、ナベ
フロの喜劇(ドリフもの)なん
かも多い。虫フロのアニメは、
いまや、世界のトミタリとなっ
た富田勲が、多く音楽を担当して
いたのだが、宮川さんもかなり
やっけるのかな? 「ワンザくん」
という動物アニメが、宮川さんご
した。そんなもんで、虫フロ残

党の山本暎一の仕事に加わって
いるのであろー。富田さんは、
やたらスケールの大きい曲を書
いて、今はシンセサイザリとし
て有名になつたけど、「ヤマト」
の宮川さんも、負けずにシンセ
サイザリを使つて、迫力ある音楽
をつけていた。

舛田利雄については、説明の
必要はあるまい。豊田有恒は、
SF作家。松本零士は「男おい
どん」ね。けど、SFマンガや
戦争マンガでは、「日本のカート
ヴオネガット・Jr」といつても
いい。資質をみせる人。ヴオネガ
ットと比べるのは、ちよつとム
チャなんだけど、わが国のSF
のレベルからすれば、そういう
ものだろう。

主なスタツフだけみても、こ
のソウソウたる顔ぶれ。スタツ
フの総数は、ふつうのアニメの
三倍ぐらい。演出と監督と、ど
うちがうのかわからんが、スタ
ツフの意気込みは、充分、画の
上に出ている。原作は、新書版
として発行されて、原書は、これ
は、松本さんが描いているが、こ
れ、少女マンガが並み。アニメの
方は、少女マンガが並み。アニメ
幽霊というか雪女のような、カ

ゲのうすい美女といいい、大体、
 松本さんらしい画に存っている。
 「ヤマト」のヒロイン・雪も、
 その名の通り、雪のような女。
 お話は、22世紀、地球が未知
 の惑星がミラスからのミサイル
 攻撃で放射能に汚染され、海は
 干上がり都市は破壊され、赤茶
 化した星となり、人類は地下都市
 でかろうじて生きのびているが
 このまま汚染と攻撃がつづけば
 あと一年の生命。そこへ、これ
 も未知の惑星イスカンダルの王
 女・スターシャからメッセー
 イスカンダルへ放射能除去装置
 をとりに来れば、地球を救える。
 そとで、海底に眠るヤマトを改
 造。人類初の光速宇宙艦が誕
 生。イスカンダル目指し、
 14万光年の未知の宇宙へ旅立つ。
 タイム・リミットは一年。毎回
 ラストに「人類滅亡まであと×
 ×日」と、タイムトルが出る。
 感動の大河冒険ロマンなので、
 ストーリーを追うだけでも、そ
 なりの紙数を要するから、それ
 は、またの機会に。

かに息を引きとる。それより前
 がミラス星總統が最後の捨て身
 の攻撃をかけてきた際、ヒロイ
 ン・雪は、自らの生命を賭けて
 戦士・古代進（ゾオ）もいけ
 ど、松本マンガの登場人物は、
 みんないかにも名前前の「だ」を救
 う。この時の描写は、スローモ
 ーションで、雪が床に崩れおち
 なんかもう、こんなに美しくて
 いいのか！まさに、この世のも
 のならぬ美しさ！雪を失っては
 じめて、進は雪の愛を知り、泣
 き崩れる。雪にも地球を見せ
 やろうと、雪のなきがらを抱い
 てフリーツジへ。その頃、艦長は
 自室で永遠の眠りにつく。
 艦長は、前もって死
 期を自覚し、死のま
 ぎゆ、わしの魂が
 身体をはなれると、
 どこへ行くのかと、
 と語っていった。ど
 彼が息を引きとると
 なんと、雪がよみか
 えるのだ！なんとい
 うアナクロ!? 非科学
 的SF!? スペース
 ギイとは、ニア
 ニア

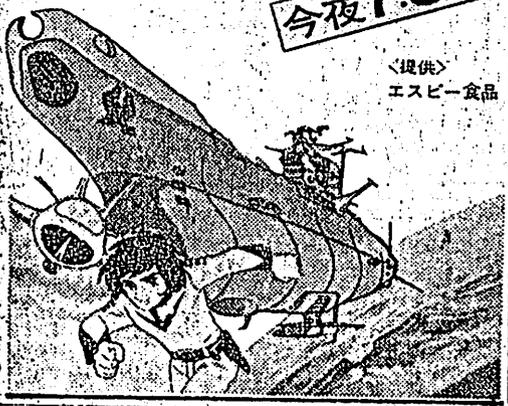
宇宙戦士の愛と冒険のSFアニメーション!!

宇宙戦艦ヤマト

くろがねの戦艦ヤマトが空を飛ぶ!!
 危機の地球を救うため、宇宙戦艦ヤマトは
 14万光年の宇宙をとびまわる。

今夜7:30

提供 エスピー食品



ものだ。地球が近づくと、すい込
 まれて行くヤマト。機械音が遠
 く小さく、テロツフ。二二〇〇
 年九月六日、ヤマト生還。地球
 は何事もなかったかのよう。息
 づいていた。地球が、青くよみ
 くみかれば、地球が、青くよみ
 がえる。残念！。完全無音。
 不明。残念！。画面の下から
 青い（？）地球、消えて行く。上
 へ、静かにクレジツト・タイ
 トルが現われ、消えて行く。本
 ラストの無音シーンには、本
 に感動的胸がジーンと。本
 た。M永遠の輝きに命の艦をと
 りう（ユーミン）空と海の輝
 きに向けて、提供YOTA

「レットバロン」は「ヤマト」
 ともにも、その面白さすばらしい
 をうまく述べられず、歯がゆ
 い気持ちなのだ。ストリー
 ンダ、仮面ライダー対シヨツカ
 ーと大差ないお話かとバカに
 されかねない。ミーム。ツレ
 ッドバロンは、J・F・アマン
 ヲザルドスのお子様版といっ
 てもいいか。ロボット帝国の中
 枢にあるのは、超知性のカタマ
 リ、脳ミソのバケモノ「ザル
 ドス」のクリスタルに匹敵する。
 二いつを破壊しようとしても、
 オートメーションで立ちまち再
 生する。この人工頭脳や、それ
 を維持するシステムを誰が作っ
 たかはわからない。「禁断の惑
 星」のオートメーション・シス
 テムのように、それ自体で永遠
 に不滅なのだ。この人工頭脳の
 云いなりになって、人類を不老
 不死のサイボーグに作りかえよ
 うとする天文科学者（実は彼こ
 そ、シツドバロン）の生みの親
 ぞ、主人公の父でもあるという
 ドンデン返し、が、最後に人間
 の心をと戻し、ロボットは
 人間になることは出来ない。大
 人間は、生まれ育ち年を重ね大

「ヤマト」の方は、14万年
 を旅して目的の地へ着いてみる
 と、人類を滅ぼそうとするガミ
 ラスと、救おうとするイスカン
 ダルは、存亡と双子星。しかも
 もに、滅びかけている星。ガミ
 ラスは、他の宇宙へ侵略の手を
 のばし、生みのがようとしてい
 る。男だけのフアシズムの星。
 どうやってハン殖しているのか
 したらん？一方、イスカンダルは
 静かに自滅を待つ。生き残って
 いるのは、なんど、王女スター
 シヤと、その妹スターヤの二人
 だけ。この村極的な二つの星の
 間に、地球の性格がおかれるこ
 とになるわけ。イスタンダルの
 サイシャは、ヤマトにメツセル

地に返ればいいのだ。滅びない
 生命など、滅びない生命など、
 と云い残して、こいつ切れる。彼
 自身、サイボーグ化していたの
 たか。人間として生命を全うす
 る。ラストは、富士山のふもと
 で、野点（！）をやっている。
 ムさくらさくらこのメロデー
 が流れるという、超現実的（？）
 ハッピー・エンドとなり、アゼ
 ンとさせられた。

ジを届けようとして命を落とす。
 ヤマトがイスカンダルへ着くと
 たった一人の生き残りスターシ
 ヤが、ヤマトの雪をみて、おど
 ろく。なんと、スターシヤに生き
 写しなのだ！14万年をへだて
 て、うり二つの人間が生きてい
 たという、気の遠くなるような
 お話。他に、いろいろ性格を
 与えられた人物が登場し、フク
 ザツで、スターシヤと雪の描き
 方から、松本マンガの女性像を
 ウンヌンするのも興味あること
 ではあるう。スターシヤは、雪
 よりも、更に更に美しく、文字
 通り、カゲがうすい。とて
 もこの世で生きていけないよう
 にみえる、非現実的な美女。髪
 も眼も肌も、実にフシギな色彩
 をもって描かれている。
 そんなことはともかく、結局
 ヒロインとなるのは雪であり、
 ヒロインは進どある。YのTA
 の言にならえ、ば、スターシヤは
 陰のヒロイン、老艦長は陰のヒ
 ーローといえよう。男なるもの
 と女なるものの分裂の悲劇を、
 ガミラスとイスカンダルに託
 し、戦いの果てへそれは苦い勝
 利として描かれて、地球の生

命が再生することを暗示して、物語は終つてゐる。どうも云い足りないけれど、何にしても、ぼくにとつてのSFとは、スペキュレイティブ・ファンタジイのことであり、ほんの「非科学的」であつてかまわないし、そうあるべきだとも思つてゐる。本格的にSFを論じることもできない。SFを語るよき、フロイト理論みたいなものを「科学的」に引用してチヨウチヨウするのは好きではないし、そんなアタマも、残念ながら持ちあわせていない。といつて、「B級」志向というか、たとえば、日本列島がいかに「リアル」に「科学」にかなうように沈没するかをウンヌンするのにもバカらしい。SFといふのも、どうも好きではない。ヘミミュージカルにしても、超リアリズムであつても、ファンタジイであつても、スペキュレイティブな可能性を持ち得る。

ヒマと興味のある人は、カー・ヴォネガット・Jrの一連のSF小説を讀んでみて下さい。

「タイタンの妖女」「猫のゆりかご」「屠殺場5号」など、早川書房刊。「猫のゆりかご」には、たしか、「こんな一節があつたと思う。」「グランファールをみたいなら、凡船の皮をむいてごらん」

▼「ヤマト」の評のかわりに、カー・ヴォネガット・Jrの「とば」を掲げておこう。「科学が宗教を廃止したといふのは、われわれの時代の最大のホラです。科学が二つしてしまつたのは、アダムとイブの話と、ヨナと鯨の話だけ」

「最も馬鹿馬鹿しい迷信を一つ頭から信じて下さい——人類は宇宙の中心にあり、全能の神の一番大きな夢を託された存在である。その夢が実現するかしないかは、われわれにかかつていない。」

「人間が宇宙の中心に居るにせよ、いないにせよ、芸術は人間を宇宙の中心に据えてみせます。それに対して、軍事科学の力は、人間を塵芥のように扱つて、人間の子供や人間の都市も塵芥のよう扱います。広大な宇宙の前では人間はまったくつまらない存在であるという軍事科学の主張はおそらく正しいのだ。それが、わたしは人間が、つまらない存在だということ（悲観主義者のメッセージ）」

▼YOTAの意見。「ヤマト」みた。真田の手足は義手義足で「オレは科学のゴウマン士がにくだい」なんていうのね。MAOが以前、松本零士は日本のヴォネガット・Jrといつてたけど、そんなとこにも現われなくて、こんなとこに「猫のゆりかご」の講演版が「悲観主義者のメッセージ」で、「猫のゆりかご」は「バイブルな主時代のバイブル」てな感じ、スゴカッタ。

★「悲観主義者」は、中央公論「海」75-2月号に掲載。

鮮やかに現代を斬る映像の世界。

製作の流れを年代順に追いながらその内幕に迫ります。



『バイオレンス』の世界の深作欣二作品

- 誇り高き挑戦(東映・昭37.3)
- 狼と豚と人間(東映・昭39.8)
- 黒蜥蜴(松竹・昭43.8)
- 博徒外人部隊(東映・昭46.1)
- 軍旗はためく下に(東宝・昭47.3)
- 人斬り与次・狂犬三兄弟(東映・昭47.10)
- 仁義なき戦い(東映・昭48.1)
- 新・仁義なき戦い(東映・昭49.12)
- 仁義の墓場(東映・昭50.3)



『フィーリングの世界』の藤田敏八作品

- 非行少年・陽の出の叫び(日活・昭42.6)
- 新宿アウトロー・ふっ飛ばせ(日活・昭45.10)
- 八月はエロスの匂い(日活・昭47.8)
- 赤い鳥逃げた(東宝・昭48.2)
- 修羅雪姫(東宝・昭48.12)
- 赤ちょうちん(日活・昭49.3)
- 修羅雪姫・怨み恋歌(東宝・昭49.6)
- バージンプールズ(日活・昭49.11)
- 炎の肖像(日活・昭49.12)

神代辰巳 深作欣二 藤田敏八

『エロスの世界』の神代辰巳作品

- かぶりつき人生(日活・昭43.4)
- 一条さゆり・濡れた欲情(日活・昭47.10)
- 四畳半襖の裏張り(日活・昭48.11)
- 濡れた欲情・特出し21人(日活・昭49.1)
- 錠(日活・昭49.5)
- 青春の蹉跌(東宝・昭49.7)
- 赤線玉の井・ぬけられます(日活・昭49.9)
- 宵待草(日活・昭49.12)
- 袴の火(東宝・昭50.4)



現代の映画作家

入場無料

神代辰巳 深作欣二 藤田敏八

の三人展

●新館8階＝大催事場

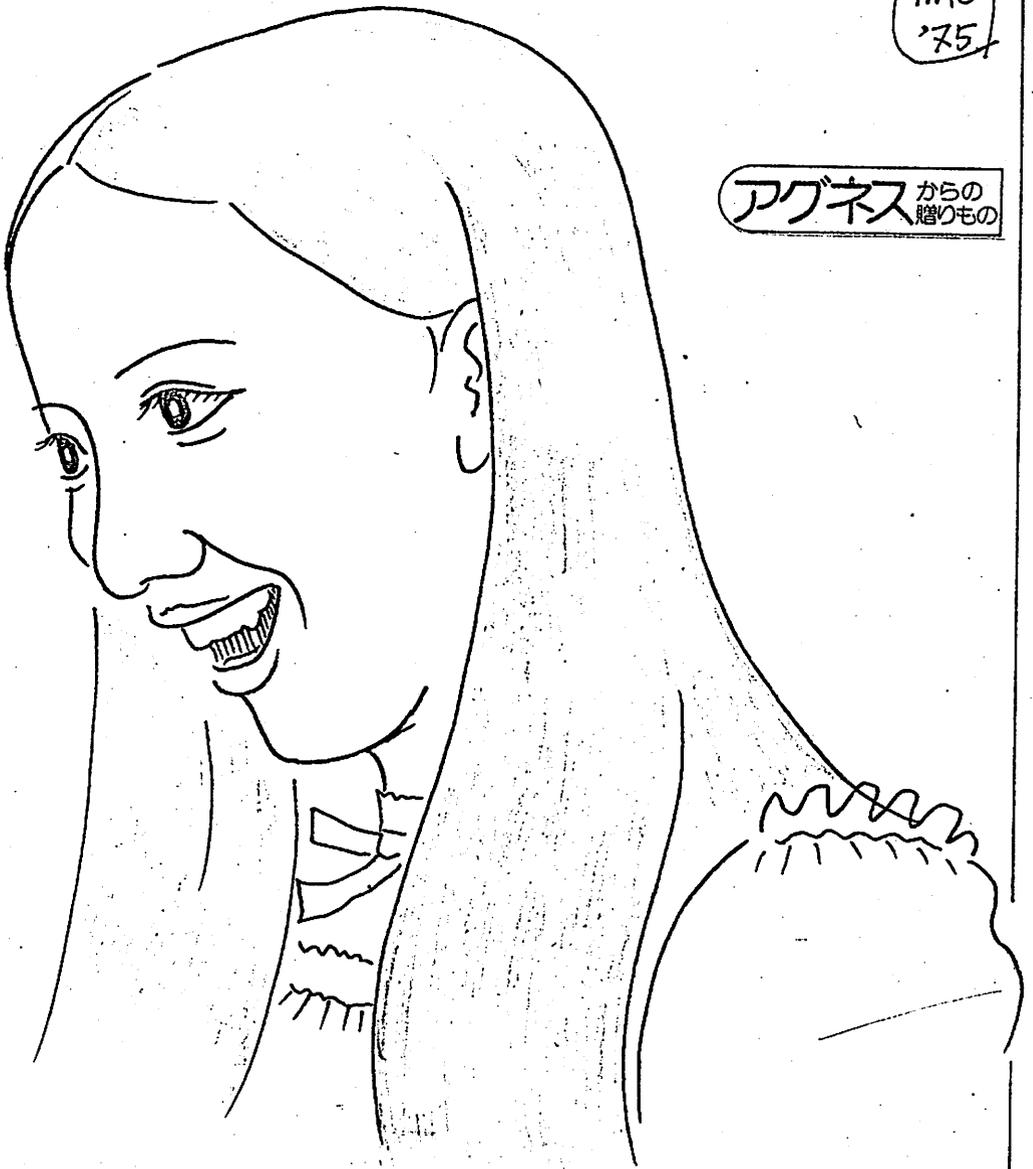
- 監修＝斎藤正治(映画評論家)
- 後援＝株式会社キネマ旬報社/月刊シネリオ
- 協力＝松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/日活株式会社

★ゴールデン・ウィークのある日、豊橋のデパートで、上の広告のような催しがあって、これはタダで映画をみられるのかしらん？とよろこんで出かけてみたら、カッコいいのは広告だけで、ひどくつまらないステル展があっただけ。監修の斎藤正治・後援のキネ旬か。さもありなん。

えつと、いまはもう上の三人には、ほとんど興味ないのでオドモいのです。この前TVで舛田利雄の「太陽への脱出」といつのをみたら、これ「誇り高き挑戦」のあからさまなりメイクで、舛田さんのリメイク好きにはあまされる。全く、この当時の日活にはどんなメイクが埋もれているか、わからぬのだよ。

MAD
'75

アグネスからの贈りもの



Q. アグネスはいま、大人？ それとも子供？

A. まだ成長中。なんちゃーの、中途半端のところが。

Q. どういう状態になったら大人になったといえると思う？

A. わたしのことを愛してくれる人ができるまでは大人になったつもり... 大人にならないと思う。だから40歳になってもまだ成長中かもしれない(笑)。

Q. どういう大人になると思う？

A. みんな大人になるよ なるよって言うけど、わたしは簡単にいかないの。心の中はいつまでもせわやか、すなおな子供みたいな心でいたい。でも人間って自然に成長しなくちゃいけないところがいるから、この辺で少しずつ大人に近づくつもりです。そして、自分ひとりで生きれると思わないことね。(March '75)



ROOM JOURNAL ROOM

★こうしてミニコミみたいなのをやっている。思わぬ受けとめ方をされたり、誤解、土まじり、何も通じなかつたり、通じたのか通じなかつたのかも判らなかつたり、いろいろウンザリすることも多い。なぜ、そういうメンドウが起るのかも結局判り得ないのだから、それは仕方ないことだ。誤解曲解も理解の内だと、とりあえずそう考えるようにしておこう。

★どオでもいいようない例。これまでに、山口百恵だ栗田ひろみだ、といういろいろ書きちらしたの、いいかげんウンザリしてる方が少なくないようです。どのようには受けとられようとした方がいはいないけれど、ぼくは、No.2で「百恵ちゃんのアンのつもり」と云いました。あくまでも「つもり」です。つもりと本気と、どうちがうかときかれても、そままで責任もちかぬる。大体が、ぼくのもの云

いようは、これと似たりよつたりである。これと似たりよつたりである。心得ておいて下さると助かります。おまへはウソつきか？と問われ、それに答へようとする。結局、お互いに沈黙せざるを得ないハメにおちいるので、それは云いっこななし。

半分は作り話と思つて下さい
おヒマなら
真実をみつけて下さい

▼いま、ストレートに語つても、これはホントのことです。とばかりに語つても、それすらホントのことにならぬ。いたいな状況があると思つた。だからホントのことを、少なくとも自分にとつて真実にまぎたえあけるためにも、作り話に想いをたくそう。ホントのことは自分の内で、あたためよう。といつても、僕の場合だと、自分にとつての真実すら、見失いウロウロしてるのが現状なのです。くれぐれ——（奈良・牧村利光）

★ぼくが、右の唄の一節から感じたことと、牧村氏のそれとは

もしかすると、何の関連もなかつたのかもしれない。しかし、つながりがあるかないか、何か通じたのか何も通じていないのかは、コトバの裏表のようなもの。同じことなのだ。コトバの意味よりも、コトバへの関わり方のほうが、コミニケーションにあって大切なことではなないのかと、そう思つたりする。なんだから、どオでもいいよな。ことばかりにこだわっている。さいだが、ガマンして読んで下さい。どオでもよくないこと。いは、ぼくにも判らないのだし、だから、こうして書いています。けで、読む人は、それをみつけてほしいのだ。

★No.4の「自叙伝」について、かなり通じなかつた部分があったようです。もちろん、書いていたときは、それが通じるかどうかなんて、ぼくにもYのTAにも判るわけないのだから、当然の結果でもある。

▼LRY（内海陽子氏）は、No.4について「おどろくべき、ユニークかつドラマティックな構成。読みごたえ十分」、ただ

「『早すぎた自叙伝』を書きこ
 という気持ち、わからぬでもない。
 ない。けれど私には少しひっか
 かる。まだまだ『自叙伝』なご
 というコトバをつかっただけで
 ない。ふと、何かが自叙伝の役
 目を果たすコトがあれば、それ
 でいいのではないか。などと思
 う。とのこと。」

黒田邦雄さんも「『過去』を
 語れない私には、ちよつとさび
 しい号ごしたしと、書き送って
 くれた。」

「『自叙伝』というコトバは、
 過去をふり返る、という意味合
 いがよいから。でも、へいま
 現在の『へここ』に閉じらるう、
 という意図がよかつたのだけ
 れども。そして、過去・現在・
 未来のすべてがそこに存在して
 いる。過去でもあり、現在でも
 あり、未来でもあるような場所
 を探究しようというつもりなの
 だが。(『YOTA』からの手紙)

★YOTAの構成から、ぼくら
 の意図は、くみとってもらう
 と思つたのだが。単に過去を
 語る『自叙伝』とらわれない困
 っちゃうんだよナー。

「『早すぎた』『自叙伝』『序章』
 と、いさか気取つたタイト
 ルをつけたのも、気まぐれでは
 ない。そのことは、No.4の14ペ
 ージでも強調してある。単に過
 去を並べた『自叙伝』ではなく、
 「物語」であり、それは、永遠
 に「序章」で終るのかもしれない。
 い。それでいい。『早すぎた自
 叙伝』を書きこう」と云つたの
 も、字義通りに受けとられると
 困る。『早すぎた自叙伝』本文
 は、不可能なコトバによつ
 て記されるはずなのだから。い
 ま、ここに書かれたことだけが
 すべてではないのだ。と思つて
 もらうたい。ぼく自身が、もの
 を「書く」姿勢にも、それは通
 じていて、これまでも、これが
 らも、まだ書かれていないコト
 バを探すために、いま、書くの
 だ。う。ますます混乱してきた
 が、ぶっきらぼうな云い方だけ
 ど、人が生きるというのはい
 ま、へここを生きることなのだ。
 その中で、『早すぎた自叙
 伝』を書きこう、と願っているわ
 けなのだ。No.4の斎藤次郎さん
 が「はい、まへハタイム・カフセ
 ル」と云っていることに、もう

一度、耳をかたむけてほしい。
 タイム・マシンでなく、タイム
 カフセルなのぞす。タイム・カ
 フセルは、それ自体、過去へは
 戻らない。けれど、へいまへ
 ここへを、過去・現在・未来へ
 とつなげる。どうも、書けば書
 くほど、通じなくしているよう
 な気もするが、そういうコトバ
 が、逆に、書かれなかつたコト
 バを照し出してくくれるかもしれ
 ない、と思つて書いています。だ
 から、ぼく自身が、あえて、云
 へなかつたり、ゴマ化したり、云
 い現わせないかつたことを、読み
 とつてもうえたときは、うれし
 い。

かつて、川島雄三が藤本義一
 に、「この語つたさうである。
 ▼「人間の考えていふことを、
 仮に百としますとでゲスナ。言
 葉は十分の一の十でゲスナ。文
 字とは、そのまた十分の一、つ
 まり一パーセントでゲスナレ」
 (『面白半分』75・5月号)

★ぼく自身、ぼくのコトバを文
 字として理解しているのは、一
 パーセントしかなく、それを更
 に、他人に伝えようというのだ

TEST



PATTERN

●小さな恋のおはなし／アグネス・チャン (©L-8 055W 52200)
 ホップな感覚がパッチリ
 楽しめるアグネスのLP。
 「心もよさ」「ふれあい」など
 フォークもうたい込んで
 いる。語りもある。佳作。

★YのTAから、アグネスが
 らの贈りものという短編映画
 は「たいそう楽しく、チャーミ
 ングな映画」で、かの山田宏一
 さんもホメていると教えられ、
 アグネスのファンなので「つもり
 ーではなく」、二の短編も前々
 から「みたい」と思っていた。つ
 み逃して「いたのだ。すると、何
 という幸運、折良く、となり街
 で上映中。連休のある日、がキ
 どもで満員のコヤで、つづけて
 二回みるこことが出来た。

これは、本当にステキな映画
 だ。みている間、何ひとつ余分
 なことを考える必要のない。考
 える気にもならない。幸福な映
 画です。監督の名も何も覚えて
 いない。一日中、でもみていた
 い。せめて、ビートルズの「ヤア!
 ヤア! ヤア!」ぐらいの長さだ

★もフメ切(5/17)はすまじましたが、

「たら、云うことなし。
 あなたと二人、言葉も忘れ
 夢みる時よ、消えないで
 いま、この時の
 すべてを、みんな
 だいじにしたい、あなたと

★アグネスからの贈りもの
 :それは、私の心です。
 アグネスのコトバには、みじ
 んのウソもない。アグネスにと
 って、世界は充分に足るに足る
 ものであり、背理など、はじめ
 から存在しないに等しい。いま
 TVの中でそうすることの出来
 る人間は、唯一アグネスしかい
 ない。もう一人の例外は、小林
 旭ではないかと思うが、彼の場
 合は、TVを倉めた自分以外の
 ものを、すべて背理とみなして
 いるといえる。ぼくの云うこと
 をウソだと思ったら、TVの中
 のアグネスを、心してみてみる
 がいい。たわごとだと思う人は
 そう思うがいい。アグネスの笑
 顔に心をなごませない人は、よ
 ほど不幸な人でしょう。

アグネスからの贈りもの
 のタイトル・バックに、彼女自
 身が描いたイラストが使われて

PHC「陽はまた沈む」落首のあと増刷予約は、いつでも受付中です。

いて、この絵だけでも、アグネ
 スの感受性の豊かさが、充分現
 われているし、本心にうまい絵
 なので、つくづく感心してしま
 った。ぼくも、マネして似顔を
 描いてみたくなかったのだけ
 高枚を出てから数年、ラクガキ
 程度の絵さえ描いたことがな
 ったので、おつかしいな。

★TVをみないようになってか
 ら、やたらと夢をみる。いやな
 夢ばかりで落ち着かない。
 心理学と日本文学専攻のアグ
 ネスといわく「わたし、よく夢み
 るよ。夢みない人、すぐくた
 びれるし、怒りやすくなります
 「でも、あの人(フロイト)フ
 シギな人ね。いろんなことを考
 えるね。でも、わたしはあまり信
 じない」のだそうぞす。

★ユーミンの新しいソング・ブ
 ックを買った。ユーミンが、エ
 ックセーに、イソツの、親子と
 ロバの話を書いている。ぼくが
 思ってたことを、ユーミン自ら
 とてもうまく語っているのだ。
 いコだなと感心。

残った。掃除をしたり食事を作ったり洗濯物を干したり、と主婦は家の中で忙がしくたち働く存在であるわけだが、どうか腰を据えて働く姿にも、安定とやり切れなきがやはりにじんでいるのだとぼくは思った。くけ台を出して裁縫する主婦の姿は、男のビジネスの世界としっかりと対応し合っているかのようだった。

＊

芸術祭でなにかの賞をとっているからといって、もちろん再放送された昭和三十年代のドラマがみな優れているわけではない。たとえば、「カルテロ・カルロス日本へ飛ぶ」という国際親善ドラマなどはよくにはつまらなかつた。ある山村のお寺の娘がなぜスペインの修道院にはいらなければならぬのかもわからないし、宗教の違いというものが人間の生活になにをもたらすか（それは一方では戦争をも招くエネルギーをもっている）が追求されずに、一つの美談の中に解消してしまうのも物足りない。

ただ、小沢昭一の郵便屋と海を越えて手紙をとどけに来るスペイン人の郵便屋とが、ポタンの数こそ四つと七つで異っているもの、お互いに似たユニフォームを着ているのは面白かつたし、日本のお寺の鐘とスペインの教会の鐘とが意外に近い音で鳴り渡る点にも興味をひかれた。これは、国際親善とか交流とか

いうものは、むしろ生活における物質的な（それは文化の表現でもあるわけだが）共通性こそ基礎をおくべきものであり、人間の善意や博愛の精神などを単純に土台として考へてはならぬことを暗示していたのではあるまいか。

＊

日本が次第に経済的実力をたかめ、貿易の自由化を徐々に実現しつつ高度経済成長にかけて身構える時期、昭和三十年代の末近くから四十年代にかけてはそんな季節であつたらう。昭和三十七年の作品「煙の王様」はその時代相を鋭くとらえたドラマであり、経済の高度成長が壁にぶち当たって前途が混乱している今日から十余年のへだたりをおいて見ると、この期間がほくらにとつてどんな時間であつたのかを改めて顧みざるを得ない気持ちにさせられる。

ある大工業地帯で生きる貧しい一家の生活をしばとくも健気である一人の少年を中心に描くドラマであるのだが、彼の父親は工場で事故死し兄もまた事故で負傷して働けなくなる（これがまさに経済成長の裏面の事情である）ことはいうまでもない。しかし一方では、工場の太い煙突から日夜黒々と吐き出される煙は、当の少年自身にとつても高みから街全体を見おろして屈することない高邁な生の象

徴としてふり仰がれているわけである。工場等の煙が、人間の生産活動を支える肯定的で積極的なシンボルなのだと思はれていた時代がすぐそこにあつたことに驚いてしまう。そして、そういう時代を生きていた人間の方が、今よりずっと強い顔をしていたような気がしてならない。もちろん、このドラマは主人公の少年が好演であり、周囲の少年少女がまたいいのだが、それにしても、この十年ほど間にほくらが失つたものがなんであるかを痛いほどにつきつけて来るドラマである。テレビドラマのアクチュアリーについて、改めて考えてみたいという気をひきおこす刺激的な秀作であつた。

＊

その後で見た「真夜中のあいさつ」は、今回ばかりが接した中で只一つの昭和四十年代、しかも五十年に近い時期のドラマであり、カラーの作品であつた。

見終つた時、ほくらには痛切な印象が残つた。テレビドラマが、遂に放送それ自体（ここではラジオの深夜放送が素材となつている）を対象とせざるを得なくなつていゝと。

「私は貝になりたい」から十六年、テレビのドラマは自分の足を食い始めてゐる。これは衰微なのか、それとも新しい闘いのはじまりなのか。

読者サービス部 読者サービス部

ペーパー・テレビジョン 日曜日にはTVを消せ

鳥山 拓

ペーパー・テレビジョン……ペーパーとい
う英語がつくと、ロクな意味がない。ペーパ
ー・タイガーは張り子の虎、ペーパー・プッ
シャーはニセ札使用のたぐいである。ペーパ
ー・テレビジョンは、しかし、この種の比喩
ではない。ここでとりあげる以上、れつきと
したテレビ局である。略称はPHC・TV、
所在地は豊橋と札幌である。

ただし、このテレビジョン同時代者群の番
組は、絶対にブラウン管から放送されない。
日曜日にはテレビを消してもらわないと、こ
の放送はみるできない。そんなニュー
アンスなのである。

コビー・テレビ局

「日曜日にはTVを消せ」は、ゼロックス・
コビーによる、平均二〇頁位のテレビ批評誌
である。「誌」ではあるが、発刊者は、これを
「局」と考えている。この点が、理屈抜きに、
おもしろい。

いままでのテレビ批評は、新聞・雑誌・機
関誌など、活字のものがおかつた。欄も、
専門家のコラムから投書欄、最近では身の上
相談欄にも出現している。「ヘレンおばさんの
人生案内」(読売・4月27日)に「妻はテレビ
中毒・家事も外出もしない」と漫画のような
愚痴がでた。ほかに、「視聴率」からモニタ
ーまで、有形無形の批評・反応が、有力無力

を問わず、局を中心とする関係者にフィード
バックされる。

ところが、この「日曜日にはTVを消せ」
は、テレビ関係者にフィードバックするこ
とは、まず皆無だろう。形は「テレビ批評誌」
だが、本質は「テレビ局」の根拠がここにあ
る。送りつばなしだ。ただし、このテレビ局
を受信するためには、かなりの努力がいる。
東京や北海道のミニコミ誌専門の書店にもな
い。電波は受信機所在地をつかむ以外に手はな
い。

受信機及び局長は、豊橋市植田町清水山3
の5 清水井 藤田真男と札幌市東区北12東
1 中川方 池田博明である。ほくは「日曜
日にはTVを消せ」にテレビジョン同時代者
をみる。第一回にとりあげた佐々木昭一郎だ
つたら、TBS再放送ドラマ「私は貝になり
たい」(五八)をみて、「最も古めかしい浪花
節的なセンチメンリズム以外の何もない、
あんな反戦歌をうたつて「良心」を表現する
こと自体、教育的で、そうだあの作品はフロ
屋の湯の底で永眠したほうがいい」と独語す
るに違いないが、「日曜日にはTVを消せ」に
も、同じような時代や人間に対する感じ方が
ある。

テレビの雑誌・玩具

ほくには、つまらない趣味がある。テレビ

関係の本・雑誌・玩具などを収集することである。

「テレビ名所案内」(西独製・のぞくとドイツの名所・風景がうつる)

「双眼鏡」(日本製・「グレート・マジンガー」が紙芝居式についている)

たわいがないテレビ番組案内の数々。「テレ」(ドイツ)、「テレ・スマル」(ポルトガル)、「C7」(スペイン)、「TV」(スペイン)、「テレ・ボシュ」(フランス)、「テラマ」(フランス)、「テレ」(スイス)、「テレラジオ」(イタリア)、「まったく読めないハンガリーのもの、ソ連のもの——など五〇種類以上。

こうしたなかで、本格的な評論誌もあるが、そういうのは、きまつて廃刊になる。ヌーヴェル・ヴァーグの宗、アンドレ・バザン編集の「ラジオ・シネマ・テレビジョン」(ヤイギリスの季刊誌「ビューポイント」(五七―五九)などである。「ラジオ・シネマ・テレビジョン」では、アンドレ・バザンが『ヒッチコック劇場』の批評を書いていた。「ビューポイント」では、演劇論評家のJ・P・テイラーの名があつたが、三サツ目で、日本でいうガリ版刷りになり、あげくのはてに「ヘルプ、ヘルプ!!」と廃刊になつた。

こうして馬鹿げた二〇数年がすぎ、ぼくは「日曜日……」に出会うのである。が、その

前に、友人のT嬢が教えてくれた「フォーク・アート」もある。これで、ぼくは熊村仁の『海鳴り』や佐々木昭一郎の小説を読むことができた。しかし「フォーク・アート」も4号で消えるという。

TVに対する姿勢

「日曜日」にはTVを消せ」の開局(発売)は、昭和49年11月である。毎月一回のペースでだし、この4月で6サツになつた。

①開局記念特別番組『夢の島少女』(11月—豊橋)

②『夢の島少女』誌上再放送(12月—豊橋 発)

③アニメーション『ルパン三世』(1月—札幌)

④「鏡の中にある如く」レポートとディスカッション(2月—札幌)

⑤④+①七四編集編(3月—豊橋)

⑥スペシャル・プログラム(4月—豊橋) 豊橋の藤田真男は学生であり、札幌の池田博明は、この四月に先生になつた。こうした報告もすべて誌上にのる。第①号、第②号までは二人の意見で構成されているが、第③号から、急に参加の人数が増えてきた。さしあたり、第①号の「開局(創刊)」にあつた「の挨拶からいこう。

「ところで本誌は、当然にもTV批評の成立

をめざすものではなくTV局が一つ増えるようなものというならば、海賊放送——しかも大NHKに次ぐサービス・エリアを誇る!?——であり、卑近にいえばTV日記、すなわち個人的な覚え書き、もつと正確にいうなら、早い話がヒマつぶし。といつてしまえば、ミモフタもないか」

「ヒマつぶし」で開局して以来、のせられた番組を、先に並べてみよう。『夢の島少女』、『マザー』、『さすらい』(NHK)、『海鳴り』(NHK)、『6羽のかもめ』(フジ)、『ルパン三世』(NTV)、『林で書いた詩』(HBC)、『宇宙戦艦ヤマト』(NTV)などである。

テレビに係りあつていると、無意識のうちには、テレビ重症患者になり、クールなつもりで実は過熱するおそれがある。

「この一年はどちよつとTVを熱心にあみすぎで、最近では、中毒みたいになつてた。先日、NHKの『放送とあなた』という特番をみてたら、自分のみたTVを、すべて、何百冊ものノートに克明にメモしているというオバサンが出て来て、ちよつと、ソツとしてしまつた」(第⑥号—豊橋)

豊橋の彼は、テレビ・セットをもつていない。下宿の同居人のテレビをみていたそうである。こうしたテレビをのみに対する姿勢は、「日曜日……」に登場する、ほかの人びと

にも、ある程度共通している。

「牧村利光氏からのお便り——」TVとイン
スタント・ラーメンからは、ぬけ出せないし、
ぬけ出したくもない——「けだしメイ言とい
うべきか。この感じわかるんだよなア。ほ
んど、TVとラーメンとは、なぜか、切つて
も切れないのだ。貧しいといえば貧しいけど、
この二つからぬけ出せば豊かになるとは、思
えないし、その逆でもないような気がするし、
ようするに、ぼくは何を云いたいのだろうか
? 日本人が消費する(の) 即席ラーメンは、
年間40億食!」

テレビに距離を置くことやクールになるこ
とが、即テレビはなれではない。またテレビの
否定でもない。この点、専門の批評家は、どう
もどちらかに偏りがちである。二人は若も
のに似合わず、老成しているともいえそうだ。

「卑俗なるもの」への探索

テレビ・セットなしで、テレビをみてメモ
をとるオバアサンの姿にゾツとするあたり、
自画像の描き方が逆説として迫るが、豊橋一
札幌局がかぎつけているのは、どうやら「劇
画」のおいのような気がする。「劇画」その
ものではなく、においである。テレビのなか
の「卑俗性」といつた構造が、劇画と一致し
ている部分といつてもいい。「日曜日……」に
は、ドキュメンタリー作品や報道番組があま

り論じられてはいない。現実との係わりにお
いて、論じる必要を認めていないかのような
印象も受ける。

岸田戯曲賞受賞のつかこうへい(27才)の
最新作『ストリップ物語』に、一見テレビの
パロディと思われるシーンが二つでてくる。
『愛と誠』であり、もう一つは、『匿名失念』
の「合体ゴッコ」である。観客に受けている、
この二つのシーンは、テレビと劇画の合体し
たものだ。しかし、つかこうへいも、また、
テレビ・セットをもつていない。彼は銀座ソ
ニー・ビルでみるらしい。それにしても『愛
と誠』など、熱が入っている。もとは劇画と
なると、彼がかぎつけて、しかも表現してや
まないものは、劇画そのものもつ構造に違
いない。いまここで劇画論を述べるわけには
いかないが、簡単にいさつてしまうと、読
みすて文学からはみだし、高級漫画からもは
みだし、要するに、論者に認められた表現形
式(もつとも劇画は認められているが)からは
みだしてしまおうか……「卑俗性」とでもいう
もの——へ接近する姿勢が、鍵のようである。
「日曜日……」の姿勢は、テレビに、その点
を求めている。新番組でこの味をいささかも
つているのは、例えば『テレビ三面記事・ウ
ィクエンダー』(NTV)だ。

第③号、第④号のアニメ特集は、ここに文

章をひきだしてきてもあまり意味がない。第
一、それは不可能に近いほど、視覚的に構成
されている。とかく理屈のつきがちな「変身
願望論」のなかで、次の札幌一池田博明の意
見はおもしろい。

「小さい頃、月光仮面になりたかったと同時
に、とんま天狗にもなりたかった。なりたかつ
たという正確ではない。ほんとはどちらに
もなりたくなかつたのかもしれない。仮面ラ
イダーがいれば、仮面ライダーになりたがつ
たらう。要するに、他のものになりたかつた
いうだけであつて、内容まではさほど問題で
はなかつたのだ。ただ、生き残る方になりた
るのだ。こういうのは偶像とはいえないし、
「正義の味方」なぞは信条でもない、
「正義の味方」は信条でもない、しかし生き残
る方になりたい——という、正義の味方のな
かに構造として組み込まれている「権力願望」
が、状況によつて変身する可能性を察知しな
がらも、しかも生き残るといふ「強者」の、
生理的な、論理をとつていふ。

劇画とアニメをいつしよくたにできないが、
『宇宙戦艦ヤマト』(「日曜日……」)にはいい
というだけで、批評がないが)の人氣も、ロ
マン・ピカレスクな一面と、先の正義の味方
ではないが、生き残る方になりたい心情が、
どこかで結びついているに違いない。

豊橋―藤田真男は、佐々木昭一郎作品をみて、つげ義春の劇画を連想している。

第①号の「でまかせ対談」
札幌「さア、何だろう？」頭で感動を受けとめられるようなものではなかった

豊橋「つげ義春の『紅い花』のラストね、ほくは『夢の島少女』を見終った時、まずそれが浮んできた」

札幌「なるほど、似てるなア。『紅い花』も、少年が少女を背負って花畑の向うを歩いているロングで終っている。その時の二人のやさしさは、我々には関知できない距離がある。少女もオカッパだ」

これは、佐々木昭一郎作品とつげ義春の差異を説いているようで、そうではあるまい。二人も、また、佐々木作品のなかに、テレビの構造に内在している「卑俗性」といったものを探り当てているのだ。

「まず、早急に結論から述べれば、今年（七四）のTV状況の両極端は『夢の島少女』および『山口百恵』によつて示されたといえる。（略）彼女は、唄っているふりをしているにすぎない。いいかえれば『TVタレント』山口百恵自身が『うた』の不在証明となつてい

るのだ」（第②号）

両極端とは述べているが、「日曜日……」を讀むかぎり、二人のなかで、この両極端は、

立体化すると一点に合致する。それがテレビなのである。こういう考え方から、第②号では、『6羽のかもめ』（フジ）『真夜中のあいさつ』（TBS）の次の評価が生まれてくる。

「『6羽のかもめ』は、『キャロル』を取りまく人々ほど『突出』はしていないものの、『心ある』TVシナリオ・ライター倉本聡と、彼に代表されるころの『よい番組』―それは『よくない番組』を仮設した上で、それに対して『よい番組』があり得るといふ、これまた『ないものねだり』から出た発想だ―を作るべきだと思いついているTVマンたちの意欲のより廻が端的に表われた（表現されたではない）TVドラマである。」

これは、TV芸能界の「現場」でのお話である。（略）TVマンの目頃のウツパンや苦惱（ノ）がうかがえるとして評価する人もいろいろだが、こんなもので「既成」のTVを愛するやうだが、何かを「表現」できると思つたら大抵が「い」だ

『真夜中のあいさつ』については、「ほくもみてみたが、不快になつて途中でやめた。（略）もう長いこと深夜放送を聞いてるほくとしては、ドラマの中に『深夜ラジオ族』とかいう不特定多数の内の何人か（その代表が、せんだ・みつお）が登場したのをみただけで、ソツとさせられた。なれなれしくすればTV

のこちら側がみえてくると思い込んでるスタッフの思いあがりや甘えが、どうにもがまんでできなかった」

テレビのなかに、「卑なるもの」を、自然にみる（たいいていの人々が不自然にみる）ことで、「日曜日……」は凡庸な放送批評家を超えている。

第一。自らを「局」と規制することで、批評それ自体を、テレビ構造のなかに組み込んだ。時折のはみだしもあるが）

第二。「卑なるもの」を、生活のなから自然に発見する結果を生んでいる。劇画からはみだした存在を問い直しているともいえる。

第三。コピーの使用。おおくの活字がプリント方式をとり、廃刊になるなかで、コピーは、ミニコミの生産・伝達・消費の本筋にのつている。ガリ版刷りは挫折しやすい。コピーの使用は物理的側面にとどまらぬ。他人の文章・出版物も、最大限に利用できる。これが、他人のことばをもつて語ってしまう難点もであるが、それもまたコピーの思想ではないか。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

第三。コピーの使用。おおくの活字がプリント方式をとり、廃刊になるなかで、コピーは、ミニコミの生産・伝達・消費の本筋にのつている。ガリ版刷りは挫折しやすい。コピーの使用は物理的側面にとどまらぬ。他人の文章・出版物も、最大限に利用できる。これが、他人のことばをもつて語ってしまう難点もであるが、それもまたコピーの思想ではないか。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

ミニコミをとりあげることが、「うまいもの店」を書くことに似ている。が、「日曜日にはTVを消せ」は、コピーの思想をもっている。そつと、知らん顔して、見守るわけにはいかない。

書評

木村栄文 編著

六鼓・菊竹淳 論説・手記・評伝

葦書房／四六判／六九〇頁／四五〇〇円／75
・3月刊

知る人が必ずしも少なくはないであろう。菊竹については、おそらく少数の人がその名と業績を知るのみではないかと思われる。

最近刊行された『六鼓菊竹淳、論説・手記・評伝』は、菊竹に傾倒した、同郷の放送人

木村氏が、長い年月をかけて集めた資料と聞書をもとめたもので、福日紙上に掲載された菊竹の主要な論説と、彼を知る上で逸話がたい手記を収録し、それぞれに詳細な注をほどこして、それらの論説や手記が書かれた時代の背景を解説している。それだけでも大変な手数だっただろうと思われる。特に評伝は、著者が文字通り心血を傾けたといってもいいほどの苦心の作である。伝記文学としても、おもしろく読むことができるが、明治・大正

・昭和にわたる五十七年の菊竹の生涯にかかわる政治、世相を織りこんだ時代史としても、興味が深い。

評者 城戸又一
戦前、日本の政治がファッショ化してゆく中で、二人の新聞記者が、これに強い抵抗の姿勢を示した。二人とも地方新聞の記者であった。一人は信濃毎日新聞主筆桐生悠々、他の一人は福岡日日新聞編集局長菊竹淳（すなわ）。

桐生については、その壮烈な生涯について、

桐生悠々が、軍官の圧迫を受け、勤めていた新聞社から追われ、個人雑誌『他山の石』に拠って、貧乏と死病に苦しめられながら、悲壮な抵抗をつづけたのにくらべれば、菊竹は、同じように軍官の強い圧迫を受けたにしても、生涯を托した新聞社の中で、理解ある同僚と社員の一致した支持を受け、その地位と生活を奪われるようなこともなく、新聞紙上でその素志を貫くことができた。家族に

守られた死の病床で、「何といふ併せをやとけふもまた涙に濡るる袂なりけり」という辞世を残すことのできた彼の最期は、同じように家族に守られた死の病床ではあったにしても、鬼気迫る思いのする桐生の最期とは異なるものであった。

それについては、福岡日日という新聞社が、創刊以来、独特の経営と編集の伝統を持って

いたことが、非常に大きくものをいっただと思われ。

もともと自由党一政友会の機関紙として終始していきながら、その政党に従属するのではなくて、これを批判し、指導することを使命とし、経営上に赤字が出れば出資者が負担することを取りきめていた。したがって、出資者である有志の匿名組合の「実体は損失負担組合」であった。そういう特異な新聞社の成り立ちをこの本が教えてくれる。

五・一五事件（昭和七年）のとき、軍人の暴挙を真正面から痛烈に批判した論説をかかげた新聞が、福日と信毎と、二つとも地方紙であり、中央の大新聞ではなかった、ということ、今日の新聞界の状況と照らし合せても、何か考えさせられるものがある。そして二人の記者は、そろって明治初年生れの頑固なりベラリストであった。

テレビ批評専門のミニコミ誌出現

映画批評に比べ、テレビ批評の不毛さは否定し難い現実だが、その原因の一つには、映画の場合、ファンを超えた「映画青年」の厚い層が専門誌を支えているのに対し、テレビの評論誌が、商業的に成立しないことがあげられよう。が、そうした状況の中で、テレビ批評専門のミニコミ誌が出現してきたことは、見逃すことのできない現象だといえる。

このミニコミ誌は、藤田真勇さん(豊橋市東小浜町一二九)と池田博明さん(札幌市東区北一二条一)という二人のヤングが出している『日曜日にはTVを消せ』誌だ。

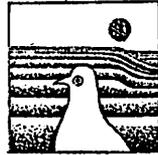
その動機は、四九年度芸術祭テレビドラマ部門に参加した、NHKの作品『夢の島少女』(作・演出 佐々木昭一郎)を、たまたま藤田さんが見たことに始まる。同じく佐々木氏の作品で、四六年度の芸術祭賞を受賞した『さすらい』を見ていた彼は、佐々木氏独特の、映像の魅力にとりつかれ、佐々木昭一郎というテレビ演出家を同じ仲間で紹介するため、親友の池田さんと相談して、ミニコミ誌を発刊し始めたのである。『誌』と云っても、手書きの文章をコピーし、ホチキスでとじただけの

二〇六たらずのもの。創刊号は昨年一月一七日に発行、『夢の島少女』を特集し、『さすらい』と対比しながら論じ、劇画のつげ義春と佐々木昭一郎の世界の、相似性まで論及している。

こうして毎月一回、定期的な刊行が始まり、読者からの投書をまじえながら、佐々木作品を中心に論じ合い、佐々木氏がラジオ時代に制作した『都会の二つの顔』までさかのぼり、そのテーマを聴く運動にまで発展していく。また、時にはNHKの機構論・組織論にまで触れ、竜村仁氏のキャロル問題の本質を論じていく、という具合なのだ。

いわば、同じ映像の社会である映画の周辺に錯集する「映画青年」的な熱っぽさを、テレビの社会に、そっくり移したような活気を、このミニコミ誌に感じることが出来る。つまり、テレビの場合、ファンはいつも「テレビ青年」はいなかった。それが、テレビ批評の専門誌の成立を阻み、テレビ批評を不毛にさせた原因なのである。それだけに、こうしたテレビという、映像をめぐる問題提起型のミニコミ誌の出現は、新しい芽だといえる。(火)

映像



「日の目みぬ名作」に世論喚起を

日本に輸入されて、日本語字幕まで入っているながら、内容が地味すぎるとか、難解で非商業的だとかいった理由で、そのまま空しく、輸入会社の倉庫に積まれている外国映画。また、まだ輸入手続きまではゆかないけれども、上映しようという配給会社や映画館を、求めて得られないまま、やがて本国に送り返されてしまふ外国映画が、少なくない。オクラにしたり、送り返したりする前に、どうだ、こういう映画を見たいとは思わないか——と、輸入会社のほうでアジってもらうと、また世論も、わくのではないか、と思うのだが……。

たとえば、ユーゴスラビア映画の、ドゥシャン・マカベエフ監督の『オルガニズムの神秘』。これは、社会主義国には珍しい堂々たるポルノだが、ただのポルノではなく、ラジカルなセックスの思想家ウィルヘルム・ライヒの評伝から、奔放にイメージを飛躍させていった前衛映画の力作でもある。ただ、すごいポルノ場面があるにもかかわらず、それが難解な思想や映像と一緒にあって、上映を希望する映画館がないらしい。

たえば、ユーゴスラビア映画の、ドゥシャン・マカベエフ監督の『オルガニズムの神秘』。これは、社会主義国には珍しい堂々たるポルノだが、ただのポルノではなく、ラジカルなセックスの思想家ウィルヘルム・ライヒの評伝から、奔放にイメージを飛躍させていった前衛映画の力作でもある。ただ、すごいポルノ場面があるにもかかわらず、それが難解な思想や映像と一緒にあって、上映を希望する映画館がないらしい。

ソビエト映画で、アンドレイ・スミルノフ監督の『遠い日の白ロシア駅』。これは第二次大戦も遠くなくて、かつて一緒に戦った戦友たちの心もバラバラなら、世代も断絶している、という、今日のソビエトの人人の、正直な気持ちを描いて好評だった作品だ。思想的しめつけの厳しくなっている今日、ますギリギリの線を巧みに描いている映画である。

無敵のソ連軍を礼賛する映画や、一九世紀文豪の蒸し返しより、こういう正直な映画こそ見たいのに、ソビエトの現代の小市民生活のことなど、どうせ興味があるまい、ということ、買手がつかないらしい。

以上は日本語の字幕まで入っていて、全く惜しいものだが、字幕を入れるところまで行かない例では、イソングマル・ペレイマンの比較的、近年の代表的な作品とされる『恥』『狼の時間』『情熱』の三本が、長らくと買手手をさがしていたが、ついにダメらしい。希望する館がなくはないが、ペレイマン作品ともなると、アメリカの配給会社がついていて、安売りはしないのだ。地味な作品を長期興行する第二、第三のATGや岩波ホールがふえないか。(一F)

■ キャロル裁判報告
この「闘争」は決つて終りが無い
そして必ず勝つと確信している
■ 龍村 仁

私自身も「キャロル」であった

私は、昭和15年4月に、兵庫県の宝塚で生れた。

もの心がつき始めるとともに、太平洋戦争が激しさを増してゆき、5才の時、戦争が終つた。昭和20年8月を境にして前後数年間に私の周辺に起つた様々なでき事を、私は今も鮮烈に記憶している。

その頃の記憶は、戦後も10年を過ぎて、世の中が落ち着きを取りもどし、私も、もの事を多少客観的にみれる年頃になってからの記憶とは違って幼年期の私の生理に、直接、何んの遮蔽物もなく注入された記憶だったものだから、その記憶が蘇がえってくる時、私はいつも、私の眼前でガラス容器の中の液体絵具が壁にぶつかって一瞬に飛び散った時の様な何か目が眩む様な想いがする。
あの頃の記憶には、飛び散った原色の色と鼻をつく強烈な匂いがある。

そして私は、32才の時、突然キャロルに再会した。キャロルは、二人の強烈な個性をもつた在日朝鮮人青年に依つて、戦後30年を経た日本の太平状況に向つて投げつけられて炸裂した、原色の液体絵具であった。この日本に生れ、朝鮮語をしゃべれず、ロックンロールとテレビジョンに依つて育てられた二人の在日朝鮮人青年、あるいは日本人青年の、両極に引き裂かれた魂と肉体の激しい葛藤がある。「キャロル」の圧倒的な迫力をつくっていた。

「キャロル」とは、朝鮮人の魂を持ち、アメリカ人の姿・形をした日本人の事なのだ。

そして、32才でキャロルに再会した一瞬に、私は、自分自身も又「キャロル」であった事を思い知つたのだ。

あの日から私の周りに起つて来た様々な出来事は、その一つ一つの局面に於いては色々苦しい事も多かったけれども、総体としては私にとってごく素直な、自然な出来事になった。

NHK相手の裁判闘争をはじめて既に一年、

私は今35才になっている。

「キャロル裁判」を楽しいと思う

私と小野耕世の懲戒免職が発令されたのは昨年9月9日の事だった。

この一年間、私達は東京地裁に解雇無効の訴えを起し、裁判闘争を続けて来た。

公判も、すでに6回を数えている。「闘争」と呼ぶには多少ためらいを感じる程ゆるやかなベースの、どこか問の抜けたところのあるこの「キャロル裁判」を、私は、いつの間にか、楽しいとさえ思う様になっている。

裁判を楽しんでいる、などと言うと、まじめな「活動家」諸君にしかられるかもしれないけれど、実際「闘争」は、苦しさに耐えるだけじゃ絶対に続かないものだ、というのが今の私の正直な実感なのだ。

逆にいえば、こと程左様に、裁判闘争というのは、しんどい闘争でもある。

お上が与えてくれる形の中だけで皮判を続け

退行移動

〈私〉の中にひとり少年がいました。

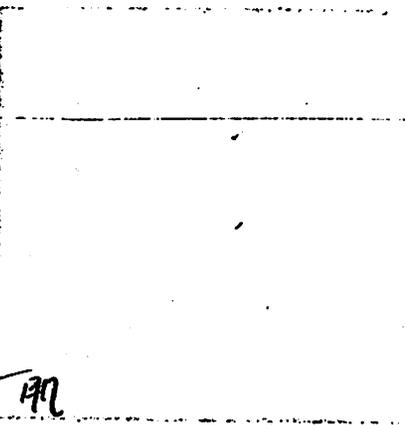
佐々木昭一郎

少年の中に甘々の海がありました。

あの夢が来た。

少年の夢

私、次下、彼、→私



五能線は山裾にしがみつこうにして歩いて移動する真冬の風景は凍りついた色だった。彼は列車の一番先頭の窓ガラスに顔をこすりつけるようにして立っていた。真正面にはやがて、海がいつばいに開けて見えるはずであった。そこへ行くには、列車は幾つものトンネルを潜り抜けなければならなかった。彼は自分の手を見つめた。手も凍りついた灰色だった。手は十七才の少年のものとはとても考えられない程寒々としていた。タール色の爪には無数の縦線が走っていて、それは既に人生の大半を移動した中年の生気しか示していないかった。手相の成功線は真中で途切れ、生命線だけが異常に手首の青筋まで走っていた。愛情線は一本もなく、彼の掌は人間の居ない荒地のようだった。「この自分から上着をとり、シャツをとり、そして全てをとりまわしたら、一体最後には何が残るのかな」と、幼少な雑言を発した。その途端一本だけ残っている鼻の乳歯が痛みはじめた。この歯はなつてきた乳歯が生き残っているのは異常だ。一度だけその乳歯を人に見られたことがあった。中学の校医で

哲学者という仇名の歯医者がいた。身体検査の時、哲学者の歯鏡は乳歯の脇でビタリと止った。長い沈黙の後、哲学者は、「これは魂の歯だ」と謎めいた言葉を吐いた。中学三年の冬だった。彼の乳歯が奥歯の一本を残して全部抜けたのは六才の時だった。その冬、彼は上野駅跡の海軍墓地で母親と別れた。汽車が駅を出てから、彼は母親がくれた風呂敷包みを開けた。チューブのチヨコレートと、「広い天」という本があった。その本は戦争中の本だった。一人で疎開する少年が母と駅で別れる物語だった。一つの星を決めて、毎晩同じ時刻に二人でその星を見よう、という悲しいお話だった。彼は大粒の涙を落ささせた。彼は、今、流行っている「見上げてごらん夜の星を」という唄を思い起した。それから本と唄の作者を憎んだ。獅子文六という人を憎んだ。戦争にかこつけて人を別れさせ、あけくんに涙まで流させて、金を儲けている作者の世界を憎んだ。夜間中学の生徒にかこつけて唄を作ったもう一人の作者の世界を憎んだ。彼はチューブチヨコレートを飲んだ。ウドン粉と血潮絵具の味がした。涙を押える為、力いっぱい奥歯をかみしめた。歯ぐきが切れ血が流れ出した。チヨコレートと同じ色だった。本の間から車掌宛の封書が出てきた。母親が書いたものだった。封書は見知らぬ駅の駅長に手渡され、駅長から署長へ、村長から住職へ、村人から村人へと移動した。封書と一緒に彼の身柄も移動した。こうして彼は中学を出てゆくまで、声を殺した人生を生きてきた。母親と会うことはもうなかった。乳歯の激痛が如のてっぺんからつま先まで走った。目の前にトンネルが見えた。五能線は管筒を穿した。女の叫び声に似ていた。列車はトンネルに入った。彼は快感を覚えた。頭のとっぺんから体ごと暗い安心できる穴の中に吸い込まれてゆくような感覚だった。トンネルの水筒が何回も列車の窓ガラスを濡らした。トンネルのずくと奥の方に白い光が浮んだ。それは女の体だった。彼が殺してしまった少女の体だった。彼が撮った、たった一本の映画。その主人公の少女の白い体だった。少女の胸元は上下に息づいているようだったが、目は

出るとまたトンネルに入った。列車は同じトンネルを往復している様だった。移動してゆく風景は、何一つとして彼の目には見えていかなかったのだ。見えているものはたつた一つしかなかった。目を閉じて、目を閉いても、目を移動させても、見えていたものはたつた一人の少女だけだ。金曜日、金曜日の夜、しかし、彼は止めたままだった。

彼の生涯の目的は、一人の少女を映画に撮り、彼女と永久に暮らすことであつた。途方もない夢であつた。しかし、これ以外に人生の目的は何もなかった。

その少女は、彼のアパートの近くにある菓子屋の二階に住んでいた。少女は二階の窓からいつも遠くを見つめたまま立ちつくしている事が多かった。少女は窓の外に静かな空想の世界を持っているように見えた。唐には老夫婦が坐つていて、少女が唐風に立つことはなかった。唐の外には万年藤が咲いていた。その脇には水道の蛇口がひとつ突出して、蛇口の下には、少女がいつも足を洗つたために使つたボリバケツがひとつ、置いてあつた。少女はなぜ足を洗うのか、誰だつた。少女が二階から下りてくるのは足を洗つ時だけだつた。彼は、そのボリバケツの水を汲みとるために、キヤラメル一個を買いに行く。彼は少女の水で手を洗い、それから、コップにすくつて飲む。そんな日が一ヶ月も経たない。

「きみに、ほれたから、映画を撮りたい」。そんな一流作家並みのセリフを一度だけ吐いてみた。彼は思ひ続けていた。「きみに、ほれたから、映画を撮りたい」。少女は、大きな目を見開いて彼を見つめた。彼は、彼のシナリオを力いっぱい彼女に語つた。「きみに、ほれたから、映画を撮りたい」。……何という役し文句なのだろう。少年は自分で自分の言葉を解いた。彼は朝から晩まで少女を見張つた。そして一日だけ少女が外出する事を見つけた。毎週金曜日の夕方、少女は赤いワンピースを着て外出する。少女は、彼のアパートのすぐ近くを流れている、近々埋められる事になつていく運河の橋の上に立つ。そこへ、白い車が迎えに来る。白い車には三十過ぎの男が乗つていて、少女を連れ去る。車は夜中の一時過ぎに、同じ橋の上で一分間

位止る。車を下りた少女は、馳け足で掃宅しこつり裏口から二階へ駆け上る。これが、金曜日の少女の行動だつた。彼は、千布団二組を盗むと、アパートの三層間に運び込んだ。押入れの上段が彼の寝床、畳の上が少女の寝床と決めて、次の金曜日を持つた。その夜は雨だつた。彼の目的は、少女を橋から車に突落し、気絶させてアパートに運んでくる事であつた。そして、その通りになつた。車は走り去つた。突落された少女は運河の船の角で頭を打つて気を失なつた。彼はトビの先端を少女の足にひっかけ、川淵の洗い場の上に引ずり上げた。トビの傷口から血が流れた。用意周到の計画だつた。彼は少女をかつぎ上げ、背負つてアパートまで走つた。少女の白い肌、白い胸は上下に激かに息づいていたが少女は目を閉じたまま、死んでいるように見えた。

その日から夢の様な日が続いた。少女は彼が盗んだ牛乳を飲み、彼が盗んだ浴衣を着せられ、この世のものとも思えない女に成長していった。二人は人目を忍んで街を散歩した。歩く少女を振返らない者は誰も居なかつた。少女は少年と二人っきりの生活を心から喜んだ。二人はままことのような生活を続けた。少年は金になる職場を転々と移動して働いた。「きみに、ほれたから、映画を撮るんだ」。この言葉を彼は何回も、数えきれない程、少女に語りかけた。少女はその度に、体ごと喜びを表現した。少女に関心を持つものは、例え親友でも、許すことが出来なかつた。例え、何の関心がなくとも、二人の間に入らうとする人間は殺さなければならぬ。

恐れていた日がやつて来た。ある日、職場から帰つてみると、少女は姿を消していた。浴衣はきちんとたたんであつた。隣の花が枯れてあつた。書置きは何もなかった。彼は少女の着ていた浴衣を前に着て、泣き続けた。少女の匂いだけが残つていた。家に戻つたのかと思ひ彼は菓子屋を買いふりをして菓子屋へ行って見た。別の客がいて少女の噂をして聞いた。「シヤシンのモデルに選ばれたので、すつと帰つて来ないので、と老夫婦の片方がその客に話していた。彼は気も狂わんばかりだつた。それからというもの、彼は職場を

ぼんやりかして、東京中を探した。犬のよう
な嗅覚は、怒怒を呼んだ。少女は居た。その
スタジオのあるマンションの狭い奥に居た。
鍵穴からシャッターの連続音が彼の耳に
響き渡った。「ほれたから、隠さんだ」、カ
メラマンの声が聞えた。その声は、何回もル
ープになって、彼の柄天をかきまわした。彼
は狂いそうになった。彼は街に出て、思案即
決した。松葉杖をついた青年を振り倒すと
杖を奪い、眼鏡屋の店頭から一番黒いサンク
ラスをかつばらって、男のマンションの外で
待ち伏せた。夜になった。鍵穴の奥で、ほれ
たから、撮るんだ」という男の声がきこえて
いた。それから少女は、ソファの上に横にさ
れた。男はカメラを放り出し、ソファの少女
の耳元に、同じ言葉を吐き続けた。少女は身
動きもしなかった。それは、丁度、円卓の上
に置かれた王様の一般料理の様だった。深夜
になった。男は、少女を抱きかかえるよう
にしてガレージに向った。男は橋の上を走り去
った車の人物と似ていた。この種の職業の人
物は全部同じ様な顔をしているのか、と少年
は一瞬考えた。少女が先に車に乗った。男が
運転席側のドアに向きを変えたその瞬間、彼
は松葉杖で思いっきり男を殴り殺した。殺し
ている自分の顔が、ドアガラスに映って、彼
は一層興奮した。自分の顔をみながら、彼は
男をメッタ打ちにした。その男の死体は、ド
プの中に埋められている。

少女を探す日が続いた。ある日、彼は少女
のポストローを見た。少女は映画に出演するこ
とになったのだ。そのステージは江戸川にあ
った。撮影が行なわれていた。彼のか細い体
の倍もある様なレスラーと少女のラブシーン
が撮影されていた。監督がレスラーを大声で
怒鳴っていた。「俺の分身がお前なんだ。俺は
この女にほれているから、映画を撮るんだ。」
少年はとっさに何をしようか考えた。彼は火
をつけようと考えた。だがガソリンを買いに
行っている間に、撮影は終わって、人影はなくな
っていた。映画は欺作だった。スクリーンに
は少女が映っていたが、それは無論、影でし
かなかつた。その監督の死体は、地下鉄工事
のコンクリートのはるか下方に隠れている。

夜 満月が 満ちてくると、川面に
ついていた。大きな磨木が二本、ぶつかり合
う音で彼は目を覚ました。彼は、彼女の目を
飲む夢を見ていた。川面には宇宙がはりつい
ていた。「世界が孤独だから私は飛ぶのさ」
舞台の照明が一斉に消され、スポットが少女
の上半身を照らして、このセリフをきか
けた。少女は舞台中央の巨木の前で立ち上り、
動きを止め、深くなった上半身を客席に向け
る。幕、スポットを当てているのは舞台演出
家だった。彼は少女を主役にして多くの戯曲
をもつていた。自分で書いたものではなく買
いとったものだった。少女は十番目の主役だ

った。「きみにほれているから、二人だけで
稽古をするのだ」演出家は、五十才位の男だ
った。彼は幕前シーンの演技指導を繰り返し
た。又スポットが少女を照らした。少年は握り
しめた果物ナイフを男の下腹に突き刺した。舞
台は暗転した。男の死体はゴミの島に埋めら
れている。

少女は、安ホテルで男の帰ってくるのを待
っていた。彼は、男のキイを使ってドアを開
けた。少女は薄り、こぼれ、こぼれ、こぼれ、
て来てくれ、「どうすればいいの、どうすればいいの、あ
りきたりの言葉は聞きあきたの、ほれている
から？ありきたりの言葉は聞きあきたの、
少女はカノンのように唄い返した。列車
は東北の見知らぬ駅についた。黒い砂浜を歩
いてゆく、誰も見えない場所、大きな黒
い岩が二つあった。二人は岩の上に寝た。永
遠の海だけが二人を見ていた。二人は全く同
じ夢を見続けた。沖に浮んだ誰一人いらい島
を、彼は少女を背負って歩き続けていった。

太陽の色は真白であった。一生に一回の世界
だった。——四時間の試写は、終った。途方
もない長い映画だった。四時間のどのショツ
トにも、少女が映っていないカットはなかつ
た。ただのワンカットとしてなかつた。他の
人物とのシーンは、常に少女との2ショット
だった。移動ショットもなかつた。カメラは
常に少女を見続けていた。それは、彼の止っ
ている意識の現われだった。一つのものを見
る、その時、パンする前のものは、次に出合
うものによって、忘れられる。だが彼は、出
会いを拒否した。彼は少女を見続けた。四時
間のフィルムを見了えた者は誰一人として何
も言う事が出来なかつた。見る者は彼になる
ことよって、少女を見つづける事に耐えな
ければならなかつたし、また、そのようなフ
ィルムだった。だから見た者は作者を許める
より、少女に惚れた。少女に感情移入した。
そして彼と同じように、少女と世界を共有し
たいと望んだ。試写の後、「公開するんじや
なかつた」と後悔した。彼の目的は世界を二
人で共有して、少女と閉じこもる事だった。
しかし彼女は、共有する世界をもう一つ、更
にもう一つと夢は果てしなく開けてゆくので
あった。それは虚像の世界だった。

恐れていたことがやって来た。
彼のフィルムに出ていた人物が、次から次へ
と少女に誘いをかけた。そして少女もそれを
望んだ。「きみにほれたから、きみと世界を
共有したい。こんな言葉は一生のうち、最初
で最後なんだ。帰って来てくれ！」彼は悲痛
な叫声をあげて、少女の足にすがりついた。

